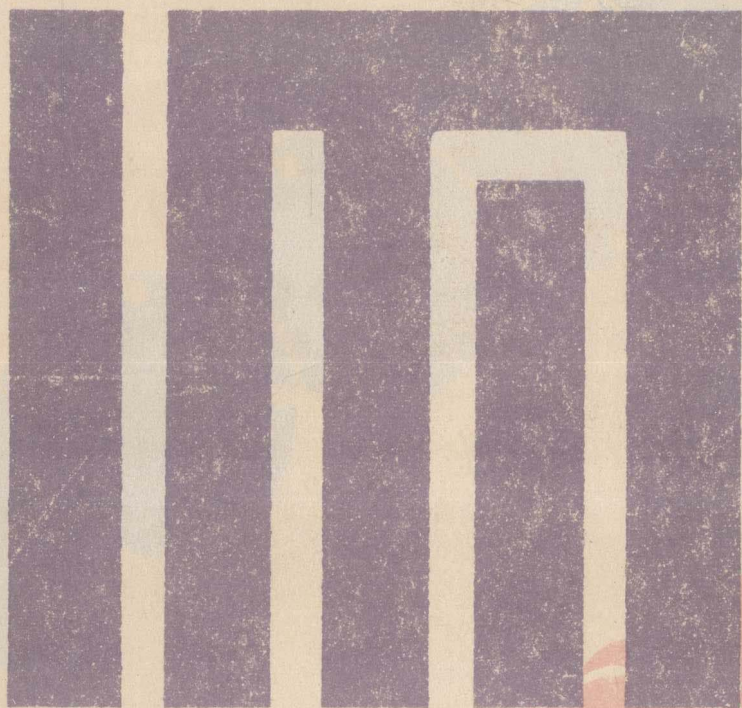




凌

花

金

集

江苏工业学院图书馆
藏书章

金

鏡花全集 卷十五 第十五回配本（全二十九卷）

定價二千四百圓

昭和十五年九月二十日 第一刷發行
昭和五十年一月六日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 株式會社 岩 波 書 店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉 名 月 1975

目次

遊	行	車	(大正二年一月)	一		
艷		書	(大正二年四月)	九七		
陽	炎	座	(大正二年五月)	一三五		
菟	弱	本	(大正二年六月)	二〇九		
參	宮	日	(大正二年八月)	二四七		
二	た	面	(大正二年九月)	四三五		
魔	法	鱧	(大正三年一月)	四五五		
第	二	菟	弱	本	(大正三年一月)	四八五
革	鞆	の	怪		(大正三年二月)	五三七
日	本	橋			(大正三年九月)	五五三

遊 行 車

其の年、二月二十三日の暮方の事で、四ツ谷大木戸から左へ曲る、内藤の屋敷の裏通りを田圃路へかゝつて、新屋敷の方へ、颯と雨の降る中を、番傘をさしてすたゝ行く、一人の年の少い色白な男があつた。

これは内藤新宿新屋敷に住んで、祿高八百石、小普請を勤めた平岡剛太郎と云ふ、定紋は五ツ蕨手の中に九耀の星、餘り澤山はない、一寸手数が掛つただけ、然るべき由緒正しい武功の家に、つい此の春の三月五日の出代りから住着いた、袖助と云ふ中間であつた。

一體、新屋敷の此の平岡家は、家風評判よく、丁ど先祖から五代に當る、當殿様も、慈悲深い柔和な仁で、奉公人には此の上もない家の事ゆゑ、出代を待構へて、所々から住着きに參る奉公人も多いのであつた處。

同じ新屋敷の一軒隣家に、清水平三郎と云ふ旗本があつて、其家の中間が手曳をして、袖助にお目見得をさせると、平岡の用人山田作太夫が見て、豫て見知越の隣家の中間が口入と云ひ、人柄も至極よささうだとあつて、其處で同四ツ谷の御狩屋横町、家主五郎兵衛と云ふのが請人の印をついて、首尾よく仕込んだのが此なる袖助。

用人作太夫の目鑑に違はず、平岡家では好い中間を置當てた、と云ふものは、新參袖助の勤振、先づ毎朝六ツ前に床を離れて、玄關、門外は申すに及ばず、屋敷うちの庭々、隅々まで、誰にも手傳はせず、其こそ塵一葉もないやうに綺麗に掃除をして、物置の裡まで、掃目のちゃんと行届くのが、強ち働きぶりをお目に掛けようと云つてする所爲でない。

第一當人、至極、身躰がよく、飛んだ綺麗好で、朝の嗽手水は無論の事、用の間を見ては井戸端へ出掛けて手桶にざぶ／＼、小盥になみ／＼と水を汲んで、顔手足をすつきりと洗ふ、日の中に、これが五度、七度と云ふのであつた。

頃も三月彌生なれば、水使ひをして寒い、冷いと云ふのではないけれど、夏の盛りに一寸金盥を持出すやうに、お手輕には行きかねる處に、念入に足の爪尖まで、一日に幾度もと云ふので、よく／＼綺麗すきには違ひない。

「あゝは出来ぬ事さ、まことに可い癖だよ。感心だなう。」と先づ、おせきと云ふ當家に長年をするお乳母どのが讃め立てる。

「可厭に生白い野郎ぢやねえか。」

「齒なんか磨いた事を見ろい。親の脛嚙る息子の齒の白さ、てえのが川柳にもあらあ、碌なもんぢやねえ。」

と朋輩ほうばいの中間ちゆうかんは、新參しんさんめ、乳母うばうけが好いい、と見みて、慫かうまあ云いつたものさ。各自てんごの仕事しごとを引ひ受うけて、一人ひとりで働はたらいてくれるから、大おほきに肩かたの憩やすまるわけで憎にくくはないので。

「お、何どうもお前まへにばかり骨ほねを折をらして済すまねえの。」

「何どういたしまして、實じつに行ゆき居ときません、はい。」と莞爾にこ々々して、第一だいいち愛嬌あいけうのある少わいもの。

で上かみのうけも、朋輩ほうばいのとほりも全まく好いい。後のちは知しらず、出代でがはりから住込すみこんで、もの十日とをと經たたぬうちに、平岡家ひらおかにはなくて成ならぬものに成なつた。

時に、其その三月ぐわつ二十九日にち、袖助そですけが奉公住ほうこうずみをしたのは、同じ月つきの十二日にちだ。とあるから、十三、十四、丁ちやうど來きてから十七日にち目に當あたる。

用人ようじんの作太夫さくたいふが、八ッ頃やごうの事ことで、部屋へやへ袖助そですけを呼よび寄よせた。

「あ、これく。」

と眼鏡めがね越こしに、じろりと人ひとを見る。が、別べつに意地悪いぢわるく目めの光ひかるのではない、至極結構しごくけつこうな中ちゆう爺いさま様。

「お、袖助そですけか、これに、御狀箱おじやうばこがあるぢや。上かみ、御用事ごようじでな、右京町うきやうまち、存ぞんじて居をるかのだ。」

「はい、否いん、尋ねまして駈出かけだして行いつて參さんじます。」

「然さまでお急いそぎではないで、は、は、い、いや駈出かけだすには及およばんがな。はあ、成程なるほど、お前まへは下總しんふさのもので、江戸えどに奉公ほうこうははじめてぢやつけな。正助しょうすけにでもよく路順みちのりを聞きいて參まるが可よい、直ちき近か

間ぢや。同じ四ツ谷ぢやでの、其の右京町で戸澤松三郎様と云へば直ぐに知れる。御門に中ぐらゐるな銀杏の樹のある邸ぢや。其へ參つて、此のな、御狀箱を差出すと、御返事を下さる、頂いて參れ。」

「畏りました。」

袖助は件の狀箱を受取つて、部屋へ下つて、身支度をするとして、無駄には帶もめず、衣紋を繕ひながら朋輩に道を聞いて、直ぐに門を出ると、門に長屋、こゝに門番が一人詰める。四人の中間が一日交代で、當日は小介と云ふ一番古參な奴。

「お使か。」

「はい。」

「何處だ。」

「右京町でございます。」

「戸澤様だな。恙う、袖助、容子が可いぜ。然うやつて片手に狀箱を持つた處は、蓑作と云ふ男振だ。今行くお邸には八重垣姫が居なさるから、お前、見染められちゃ不可ねえよ。」

「御串戯ばかり。」

「いや、眞個だ。大木戸のな、油屋の隣りに旨え鹽煎餅があらあ。精々罪を造つて來ねえ、若い

中よ。……己なんざ最う色氣より食氣だ。」

と茶うけを買はせる料簡で油を掛ける。其も合點、古參の御機嫌取りに、鹽煎餅ぐらゐるは三十四錢倒れる氣で、袖助は愛想よく、

「そんなにお急ぎではないと御用人様おつしやいます。外に御用事でもあるなら達して参りませうかね。」

「いや、取附きの蕎麥屋に二百錢が所借錢があるが、何、それまでには及ばねえ。鹽煎餅で澤山だ。行つて來ねえ、氣をつけて。戸澤様の一軒隣に、嚙着きさうな大な犬が居るが、恐れなさんな、吠えるばかりだ。」と氣を附けた、これは全くのしんせつ。もう一ツ、茶うけの禮心に、押かぶせる。

「ぢや、早く歸んねえ、衰作さん。」

「もし、冷かしては不可ません。」

と云つたが、潛門の柱の蔭で、其の狀箱を手に据直して、甲州街道の空を見たのは、此のお中間、滿更其の氣なきにしもあらず。

此邸へ勤めて、まだ何日も経たぬのに、近所の婢、子守などが、此の男を見ると、目顔でざわつく。晩方などは、ねん／＼よなぞと、ませたのが聲自慢に唄ひながら、門から覗込む様子を、

逸早く當人心得て居るから。

さて、右京町へ行つた、日中の所爲か評判の犬にも吠えられず、其處は小介なんぞとは人柄が違ふ、畜生の見る目にも、と袖助は思つたらう。其かはり、眞か、嘘か、八重は所々、途中で遅咲のを見たばかり。銀杏の葉の暗いほど、最う若葉の深い、戸澤の玄關で、ちらりとつゝじの花も見ずに……但し待つほどもなく直ぐに狀箱が返つた、返事を持つて、袖助は聊か氣拔けの體で歸つて来る。

其の八重垣姫は居なからうと、見込まれたが因果、手ぶらでは歸られないから、小介に約束をした通、大木戸で鹽煎餅を買ふ。——これは奴と呼ぶ名代の煎餅。爺さん婆さんが對向ひ、お取膳と云ふ形で焼いて居て、十八九の色白な、其こそお八重とでも云ひさうな豊艶した娘が、

「はい、お待遠様、難有う存じます。」

などと愛想よく賣る。佳い容色で。いづれ甲州街道通行のお大名が、輿の中から目尻を下げて、郷太夫、——はッ、——予が手許へ上げまするやう、其の方取計らへ、と御意がある。と三ツ輪に被布でお家騒動の因と成るか、府中あたりの長脇差が根こぎにすると、黄楊の横櫛と成つて、斬つ撲つが、はじまりさうな風がある。

戸外を通る馬士も、此家の前では色目づかひで、手綱をぐツと反身に緊める、と轡の音もしや

んくく。

往來の足の埃塵が濃く、霞が曇つて、暮れかゝる空が暗く成つたと思ふと、煎餅屋の軒へ、ぽつくと雨が掛つて來た。

煎餅の袋を了ひながら、用ありさうに、店頭へ立つて、空模様を視めて居た袖助が、

「もし、姉さん。」

「はい。」と胸へ手を置いて、一寸顔を傾ける。

「何とも申兼ねましたが番傘を一本貸して下さらないか。否、手前なんか何、素跣足で、槍の中を潛つたつて、見なさる通り、些とも構はない身體だがね。殿様のお使ひだから持つて居る品ものを濡らしたくございませぬ。其に、お家の此の煎餅は、實はね、お奥で御新造様が大お好きで、恠うやつて、何御不自由のない中を、態々お取りに成るんだから、沫でもかゝつて途中で濕氣が來て味を損じるやうな事がありますと、つい此のお店へ對しても私が濟まない。お馴染もないに、恐入るがね、どんなのでも構ひませぬ。買ものだけ凌げますと、手前は濡れたつて可いのでございませうから。」

中間づれには似合ない、もの柔かで、すらくと涎まぬ口上。云ふ事が、行届いて、しんせつも、眞心も、よく遠い耳にも聞えるので。造つけの人形のやうに傍目も觸らない爺さんが、ひよ

いと額を上げて、しげく袖助の顔を見たくらる。

「え、可うございますとも、お易いこと。」

と娘は臺所へ入ると、見通しの裏が小庭で、向うの垣根の山吹のまだ花の咲かないのが見えたつけ、謎には成らず、新しい番傘を持つて、出て、

「あ、ほんに、本降らしくなりましたねえ、ひどいのでございますよ。」

と襷掛けの白い腕で、轆轤を返し、柄の方をつツと出す。

「これは何うも、早速明日にも。」

「否、お前さん。」

「お次手で可うござりますよ。」

とお婆さんも世辭が可い。

がツちり開く、と大木戸と、大く記いて、奴、としてある、と見ると、鹽煎餅屋の臺所から出た代ものとは思はれない伊達な奴。

「難有う存じます。」

と聲を掛けて、雨を見ながら、店頭に伸上る娘を、振返つて見て袖助ニヤリとした。

すぐにしつとりとある雨の中。遅櫻のちらほらする邸町を抜けて、内藤の裏通りを、前に云つ

た其の田圃道へ掛る。

突切つて行くと新屋敷へ近路であるが、一面の田で、道は悪し、つい前が見えて居ながら畝り曲つた畦道は十町ばかり。遙に土地の巨利玄眞寺の森が見えて、其の卵塔場の人魂が時々此の裏田圃を傳ふ、なぞと可恐をなして、餘り人通りのない寂しい所。最う内藤の塀を離れると、暮方の雨に人影も見えなかつた。

二

霞が溶けたやうに降るのであるから、風も吹添はぬが、田圃道へ掛ると颯と傘に音を立てる、雨の脚がしげく成つた。

「降れ、此方や大木戸を背負つて立つんだ。」

と袖助は雫も面白さうに番傘の記を視ながら、

「女つてものは、何うしてあんなに、脆いのだらう。各自に一人一人にして見れば、頭髮一筋だつて、武士の魂ぐらるには向ふのが、一寸手を出すと直ぐに己のものに成るのは不思議だよ。故郷に居た時でも、己のために死ぬわ、活きるわと云ふ騒ぎが、二人や三人ではなかつた。江戸の女は張も強し、意地も強し、容易にや指もさせないと聞いたが、何有。觸つて見れば笹の葉の露

とやら、立所にころりと来る。鼈甲の櫛笄を可加減な旗差もの、縹子の帯を黒革絨のやうに思つて、對手に威をつけて立窘むから太刀打が出事ないんだ。へん、笄は抜けるもの、帯は解けるものと初手から極めて掛るが可い。……まこと手に餘るのはまた暗撃、飛道具、いくらも術はある、女に掛けちや、己は木下藤吉だぜ。」

と腕まくりをして、件の大木戸を差上げたもので。

「此の煎餅屋のなぞも、最う手に入つたも同然だ。傘を出した時、黙つて受取るふりをして、向うへ、ぐい、と壓したら、此方へまた突返した。此もさ、己の方でいぢけて、黙つて受取りや其までのものよ。大刀ぢやなし、傘で一才當つたくらゐに、自身番へも駈附けまい。然うすりや探り得と云ふものだ。いけすかないよと云ふ顔色をした所で、もとツこよ。四錢もお錢が要るんだやない。遠慮は無沙汰と云ふ事さ。いや、又傘を借りる時の口上なんざ、我ながらうまいものだつけない。自分は濡れてもかまはないツさ、尤も望む處だもの。殿様の品ものを濡らしくございませぬ。それ忠義な所があらはれる。おまけに向うの賣ものへ箔をつけて、小介が味噌齒で、ぱりくと、番茶の煮くらして汚なく和へる所を、御新造が玉露でめしあがるやうに言つて遣れば、つんぼでも喜びます。こゝで又傘を返すのが縁になるんだ。何とも、お大事なものをとか何とか云つて、裏の竹藪から孟宗の芽生でも引ツこ抜いて、まだ味もありますまいが、唯最うお年

よりの齒に合ふ處をなぞと爺婆を嬉しがらせる。娘が、あゝ、優しい人だと又思ふ。すぐに大木戸名代奴煎餅のお婿さん、待てよ、木下藤吉が、煎餅屋の戀婿ぢやはじまらない。むゝ、いや、あの、傘を取りに臺所へと緋縮緬がちらゝ、些と蓮葉な娘だつけ。こんがりと燥いだ所を、日永の茶うけに一口か。旨い……」

と云ふ袖助は腹の裡。頬邊むぐぐのニタぐぐもので、唯一人、其の畦路を、春のなごりに降る雨に、濡れるは望みの嬉しさうに、傘を弄つて、路も急がず、ものの半町ばかり、鼓草の中を行く。

「まをし……」

と聲がする。

「まをし。」

と背後から優しい聲。

袖助が振返ると、今、初音の其の鶯が、花笠にては凌ぎあへず、青柳も纏れ髪、島田の鬘をはらゝと雨に撓つた袖袂。しつとりと濡れながら、畦に捌いた裳長く、友染輕き褌はづれ。雪なす脛を散らしながら、雨に色濃き草霞に、姿も消々や、黄昏時。すらゝと駈け寄ると、其處に立停まつた袖助の背後で、ほつと小さな呼吸を吐いた。

「手前で。」

しつとりとして、宛然其が驚の濡れた翼に撫でられるやうな、何とも言へない心がして、直ぐに首筋許から袖助の悚然したと云ふものは、此が、なか／＼今しがた見て、其でさへ類の少い美しさだと思つた煎餅屋の娘の如きものではない。——それ、花ならば初櫻、月ならば十三夜、雪にたとへると富士の嶺、遠山の眉に丹花の唇、見ぬ唐土の王昭君、我朝の衣通姫、小町と言ふとも、此にはいかで及ぶべき、年紀のころ十九ばかり、と其の時の記録にあるのを其のまゝ、爰へ書抜くのである。

女に掛けては木下藤吉、と自分で思ふ度胸だけれども、傘の柄も颯と明く、時ならず二日月の影もさしたやうな春の花の美しさに、袖助は胸どき／＼。で、唾が乾くと、言ふことも日頃の辯舌に似ず、ぎごちない。

其の婀娜に媚めいたが、品の好い、立上つた風采に、袖助は慇懃に腰を屈めて、

「あなた様、お呼びなさいましたは。」

「あい。」

白い指をおくれ毛に掛けた風情は、柳に蝶が睡るやう。

「お前さん、まことにね、申兼ねましたけれども、其のお傘の中を貸して下さいましな。私はね、